

ハンナ・ジョイ・サワダ／北原かな子編訳

『日本語と英語で読む津軽学入門』

河西 英通・川内 淳史

近年、地域名を付した「〇〇学」、つまり地域学が目立つ。本書のタイトルにある「津軽学」に関して言えば、二〇〇五年に「津軽学に学ぶ会」から雑誌『津軽学』が刊行されている。同誌は一九九九年創刊の『東北学』に呼応したものとされている。その「東北学」について言えば、一九九一年に河北新報社から『東北学文庫』が出版されている。

全国的に見ると、「大阪学」「山梨学」「愛媛学」「播磨学」などが知られていた。先日、『大分学』なる本を書店で見つけたから、教え上げればきりがないだろう。評者（河西）の貧しい書架にも『日本史への挑戦——「関東学」の創造をめざして——』（大巧社）があった。二〇〇〇年の出版である。二〇世紀末から「〇〇学」が目立ってきたのはわけがある。一言でいうと、国民国家的歴史像、いわゆるナショナルヒストリーへの不満であり、不安である。頂点的な地域（権力の所在地）の移り変わりが織りなす「日本史」ではなく、それぞれの地域（多くの人々の住まう地）が主人公として描かれる民衆的歴史像、いわゆるリージョナルヒストリーへの期待であり、希望である。

現代の国際社会において「国家」の脆弱性・虚妄性・幻想性があらためて顕在化しているなかで、われわれの歴史認識は大きく変容し、歴史像を構成する主体は「国家」から「地域」へ移行しつつある。その意味

では、地域学の登場は不可避免のかもしれない。しかし、問題がないわけではない。久しぶりに前出の『日本史への挑戦』に目を通したら、いきなり「はじめに」のつぎの一節で止まってしまった。「僕の理想は、いろいろな地域学が総合されたときに、本当の日本歴史ができるとみているが、そのとき関東学は日本史の重要な核として、多くのことを物語るであろう。」共著者の一人、森浩一氏のことばである。

しかし、そうであろうか。たとえば、「樺太学」や「八重山学」はたんに日本史の「核」にすぎないのだろうか。めざされているのは、従来の「国家」主導の「日本史」ではなく、「本当の日本歴史」とされるが、問題はこれ（日本史）という枠組みである。「樺太学」や「八重山学」はこの枠組みを超越し、否定するものであろう。近刊の佐々木昌雄『幻視する〈アイヌ〉』（草風館）を読めば、いかに〈日本史〉研究者の歴史的思考力、人間観が貧しいか、痛いほど思い知らされる。地域学が〈日本史〉の重要であろうとかなろうと「核」として組み込まれるやいなや、地域学は当初の意図から離れて、〈日本学〉へ昇華・転落していく恐れがある。この恐れはひとり「関東学」だけの問題ではない。地域学とはそうした真正銘のリスクを伴うものであるという一般論を前提に、本書を読んでみた。

*

本書の最大の特徴は、一読してわかる通り、日本語と英語による対訳形式によって構成されている点である。これは本書が弘前大学国際交流

センターにおける留学生向け授業のテキストとして作成されたことに由来するものだが（弘前大学では中国語圏留学生よりも、英語圏留学生の方が多数なのだろうか）、このことは本書が一般書店の店頭に並び、一般読者の目に触れるに及んで、大学講義の一テキストに留まらない、大きな意義のあるものとなった。すなわち日本の「地域文化」の国際発信という点である。

今、海外では「日本文化」が注目されている。かつて海外における「日本文化」といえば「samurai」、「fujiyama」、「geisha」といったステロタイプが先行していたが、近年では「otaku（オタク）」、「anime（アニメ）」、「manga（マンガ）」といった現代日本のサブ・カルチャーに注目が集まっている。こうした動きは、海外での「日本文化」のステロタイプを覆すものとして評価される。しかし「samuraiの国」が「otakuの国」へとなっただけでは、ステロタイプの「日本文化」イメージが再生産されるだけである。「日本」には単一の「日本」に還元され得ない、多様な「文化」が拡がっていることは、これまでの地域研究の蓄積が明らかとする所である。

「地域文化」の国際発信の動きは、例えば本書の編者の一人である北原かな子氏が編者となった北原かな子・郭南燕編『津軽の歴史と文化を知る』（岩田書院、二〇〇四年）が、ニュージーランド・オタゴ大学出版会より『Tsugaru : Regional Identity on Japan's Northern Periphery』（University of Otago Press、二〇〇五年）として出版されるなど、近年精力的に展開されつつあるが、「津軽学入門」と銘打たれた本書は、後述するようにそれぞれが専門的な内容ながらも平易な文章で構成され

ており、読者が津軽の「地域文化」を英語圏において発信するには格好のテキストであると言えよう。

次に内容の点について言及する。本書は弘前大学の教員を中心に分野を超えた様々な専門家が集結し、前述のとおり専門的な知識を、しかも入門書として適切で平易な表現で執筆されている。そのため、それぞれの内容が理解しやすく、さらに非常に示唆に富んだ内容を含むものである。そのため本書は単なる入門書に留まらず、多くの論点を含んでいるが、評者の力量の関係上、ここでは三点に絞って指摘したい。

まず第一点目は、「多様性」という点である。前述のとおり「日本文化」が持つ多様性を具現するものとして「地域文化」へ注目することは必要なのだが、そうした「地域文化」もまた多様性を持つものであることもまた、かえりみられる必要がある。そうした点からすると本書の各論考は、こうした津軽の歴史・文化・民俗の多様性に関して鮮やかに描かれている。津軽出身の四人の作家が描いた「津軽」を分析したサワダ論文（七、津軽の作家たち）では、葛西善蔵や太宰治にとって故郷「津軽」とは疎外感と絶望をもたらしたものとして描かれるが、同時に北畠八穂や石坂洋次郎にとってそれは命を肯定する作品を生み出す土壌として作用するものであったとする。こうした指摘からは、各々にとつて様々に解釈し得る、多様な「津軽」という姿が浮かび上がってくる。「津軽」とは多様な像である。

第二点目は、では一体こうした多様性はどのように形成されてきたかという点である。その答えもまた本書は用意している。それは「津軽」という存在もまた、それ自体が独立独立に存在するものではなく、多様

なネットワークの中に存在しており、その中で絶えず変容しているということである。亀ヶ岡文化を論じた藤沼論文（一、亀ヶ岡文化）は、亀ヶ岡文化がその文化圏を越え、北海道北部から九州に至るまでの広範な交流を持ち、こうして形成された亀ヶ岡文化の遺物は、その芸術性を現在では世界的に評価されているとする。また津軽地方の代表的伝統工芸品である「津軽塗」を論じた佐藤論文（九、津軽塗）では、近世初頭に弘前藩で始められた漆塗が、外からの技術を取り入れることによって、今日見られる優れた工芸品「津軽塗」へと発展したとする。こうした地域間ネットワークで形成される「津軽」の多様性は前近代に留まらない。明治期に東奥義塾の外国人教師を通じてもたらされた津軽の「ウエスタン・インパクト」を論じた北原かな子論文（四、津軽のウエスタン・インパクト）では、国民国家形成期においてもなお西洋文化がダイレクトに移入され、城下町弘前が近代以降もまた変容し続ける姿を描く。ナショナルな領域に位置付く近代「津軽」もまた、世界と直結していたのである。こうした意味で津軽の多様性とは、「世界性」とも言い得るものであった。

このように「津軽」は多様なネットワークの中で形成・変容してきたのであるが、こうしたことは〈外〉との交流のみでもたらされたものではない。次はこうした「変容」をキーワードに見ていきたい。前述の北原論文では西洋文化との接触による伝統都市・弘前の変容を描いたが、「伝統都市」としての弘前もまた、その姿はアプリアリなものではない。弘前藩と弘前城、城下町弘前の歴史を論じた長谷川論文（二、弘前藩と弘前城・弘前城下町）では、一七世紀中ごろまでに形成された城下町弘

前は、一七世紀後半に至って大きな変容を遂げ、さらには近代以降の都市形成を経ること、成立期の城下町とは著しく景観が変容していることを指摘する。今日我々が目にする伝統都市・弘前もまた、変容を被った後の姿なのである。

さらにこうした地域の変容は、そこに住む人々の生活の変容によってもたらされる。杉山論文（五、津軽地域の近代化）は弘前の「近代化」の契機を近代初期と高度成長期の二つに置き、特に高度成長期の変化は、主に農村部に居住する人々が「出稼ぎ」を行うことにより、人口減がさほど問題とならずに、「産業化は進まないのに、高度消費社会がやってきた」という、独特な「近代化」がもたらされたとする。こうした社会の変容はまた地域の姿を変容させ、農業の機械化・モータリゼーションの進展による市街地の拡大および空洞化が起こったとする。社会の変容及び生活の変容は、地域の姿をも変容させるのである。

また人々の生活の変容は、地域の文化・民俗をも変容させる。津軽を代表する音楽文化である「津軽三味線」を論じた北原かな子論文（八、津軽三味線）は、元々「ボサマ」達が厳しい生活を生き抜くために身に付けた「三味線」が、昭和四〇年代以降にメディアを通じて全国的に受け入れられ、逆にルーツとしての「津軽」が浮上することを指摘する。津軽を代表する夏祭りのねぶた・ねぶたを論じた須藤論文（十四、ねぶたとねぶた）では、近世以来続くねぶた・ねぶたが、一九七〇年代の観光地化および文化財指定という戦後社会の進展にともない、青森・ねぶた・弘前・ねぶたという構図が確立し、今日的課題を抱えながら行われていることを指摘する。

また、藍染やこぎんざしといった人々の生活に密着した文化を論じた北原晴男論文や関根論文（十、津軽の藍染と藍の科学／十一、こぎんざし）でも、近代化と資本主義社会の到来により変容を余儀なくされ、今日では、それぞれに新たな意義付けが与えられていることを指摘する。

こうした変容を被りつつも地域の文化・民俗は、今もなお人々の生活に密接なものである。イタコを論じた北原かな子論文（十二、津軽のイタコ）や津軽の民間信仰であるオシラサマを論じた山田論文（十三、津軽におけるオシラサマ信仰の展開）では、伝統的民俗であるイタコやオシラサマが、形を変えながらも今も人々の生活の中に生き続けているとする。また世界遺産・白神山地を論じた牧田論文（十五、白神山地）は、マタギなどの周辺に住む人々の生活との密接な関係を取り結ぶことにより、白神はその生態系を保持してきたことを指摘する。人間と自然の共生は極めて今日的なテーマであり、津軽が育んできた「地域文化」は、現代社会に対しても鋭くその問いを投げかけている。

第三点目は、津軽が「周縁」であるという点である。津軽弁の特徴を論じた小笠原論文（六、津軽弁の音韻の特徴）では、津軽弁が政治的・心地で発達した「標準的日本語」とは異なり、「シラビーム」言語としての特長をもって発達したことを論じる。このことは言語の点からも、京都や江戸（東京）といった政治的中心地に表象される「日本文化」に対するアンチテーゼとしての「津軽」が想起される。また「周縁」とは（ペリフェリ）であると同時に（フロンティア）でもある。本州アイヌを論じた関根論文（三、本州アイヌとその暮らし）における、弘前藩が「多民族藩」であったという指摘は刺激的である。北方社会でダイナ

ミックな活動を展開していたアイヌの存在は、津軽の歴史・文化・民俗の「周縁」性と「多様性」を象徴するものである。

さて、このように示唆に富む本書であるが、本書に接したとき、率直に言って若干の違和感を覚えたことを表明せざるを得ない。それは、本書では「津軽」とは「周縁」としての独自性を持ち、「多様性」の中で「変容」しつつ豊かな歴史・文化・民俗を形成してきたものとして描かれているが、果たしてここで描かれる豊かな「津軽」とは、本当に「津軽」なのであろうか。評者の一人（川内）は津軽で生まれ、津軽で育った（津軽衆）を自負しているが、評者が感じた「津軽」の中に、この豊かさは果たして存在していたのだろうか。津軽を代表する方言詩人である高木恭造の有名な詩に「陽コあだね村」がある。その一節「若者等アみんな他處サ逃げでまて／頭サ若布生えだした爺媼ばりウヂヤウヂヤてな」。「他處サ逃げで」行った「若者」である評者にとって、「津軽」とは豊かどころか「何もない」ものの象徴そのものであった。

過日、津軽半島を一周する機会を得た。初秋の朝に輝く岩木山を背に、五所川原、金木、中里と津軽新田地帯を抜け、往時の面影を思い起こすべくも無い十三湖、さらには小泊から竜飛、上磯地域へと車を走らせた。その道中、海の彼方に北海道・渡島地方を望む竜飛岬に立ったとき、それまで常に背後にあった岩木山が、どこを探しても見つからないことに気が付いた。岩木山はしばしば「津軽」を象徴する存在として語られるが、その「象徴」はこの竜飛からは目にするできない。「津軽」が「周縁」であるとするならば、その「最周縁」に当たる竜飛にとって、岩木山という「津軽」の「象徴」はフィクションであり、海の彼方の北

海道こそがリアルなものとして映る。まことにこれは皮肉な話ではなからうか。そういえば、青森市（旧浪岡町域を除く）からも岩木山はほとんど望めない。青森市の「山」といえば八甲田である。そうした環境で育った評者にとって、岩木山は「津軽」の象徴という言説には違和感を抱いてしまう。岩木山に何の感慨も抱かない評者は、果たして〈津軽衆〉として失格なのであろうか。

しかし考えてみれば、そうした違和感もまた、「津軽」の多様性の一つなのかもしれない。「津軽学入門」と銘打った本書は入門書という性格上、津軽の歴史・文化・民俗的特徴的な事項が挙げられている。しかし編者・執筆者諸氏にそのつもりは毛頭無からうが、本書で挙げられた事項のみで「津軽」の全てが説明できるものではない。多くの〈津軽衆〉読者にとって、本書の内容は共感を得るものであると同時に、また違和感を覚えるものであると考える。そうした点で本書は、各々にとっての「津軽」を考えるきっかけとなるべきものであろう。その意味において、まさに「津軽学入門」である。

*

近年、全国各地でそれぞれの地域の歴史・文化・観光等を検定する「ご当地検定」が流行しつつある。青森県においても「津軽ひろさき検定」や「あおもり検定」が行われ、多くの人々の関心を集めている。こうした現象により、それぞれの地域へ関心が向くことは歓迎されるべきことであるが、ともすれば雑学的な知識に偏重しがちな「ご当地検定」

ブームにとって、専門家が体系的な知識を平易な文章で書いた本書は、より向学心に燃える〈津軽衆〉にとってはまさに格好のテキストであると言えよう。いずれにせよ本書は大学講義の一テキストに留まらず（今後、中国語版やハングル版を期待したい）、多くの〈津軽衆〉読者にこそ大いに読まれるべきものである。

その上で、〈津軽学〉の地平から、〈日本史〉の超越・否定が可能か、これが評者たちの最大の関心事である。

（B5変形判、二三九頁、弘前大学出版会、二〇〇八年二月、

価格一一〇円＋税）

（かわにし・ひでみち 広島大学大学院文学研究科教授、
かわうち・あつし 関西学院大学大学院文学研究科博士後期課程）